

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン

配給/UIP映画

2003 (平成15) 年5月18日鑑賞

Data

監督: スティーブン・スピルバーグ

脚本: ジェフ・ネイサンソン

出演: レオナルド・ディカプリオ/
トム・ハンクス

👁️👁️ みどころ

パイロットの制服に身を固め、次々と偽造小切手を現金化していく天才詐欺師ディカプリオ。これは1960年代の実話を犯人の自叙伝に基づき、映画化したものだ。犯罪の暗さを見せず、明るく、楽しく、カッコよく(?) ディカプリオの活躍を描く。トム・ハンクスとの追跡劇は面白いが、作品の出来は今ひとつか・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<制服姿の詐欺師ディカプリオ>

予告編は、レオナルド・ディカプリオがカッコよくパイロットの制服を着こなし、美人スチュワーデスを従え、さっそうと歩くシーンが印象的だった。もっともこんなにカッコよく決めていても、実はこれはインチキ。まだ未成年(16歳)のフランク少年(ディカプリオ)が、パイロット、医師、弁護士などに扮して莫大な額の小切手詐欺(偽造)を働いているのだ。

これだけ見るといかにも『タイタニック』(1997年)で人気沸騰したディカプリオのために製作した映画のように思えるが、実はこのフランク少年はフランク・アバグネイル Jr という実在の人物であるうえ、16歳の時からアメリカ50州を振り出しに世界26カ国で偽造小切手約250万ドルを現金化した天才詐欺師なのだ。

<この映画は事実に基づいたもの>

もっとも、悪はいつまでも栄えるものではなく、フランクは21歳の時に逮捕され、アメリカで12年の刑を宣告された。しかし5年間の服役の後、その「専門知識」と「貴重な経験」をFBIの金融犯罪部門のために役立て、協力するという条件で釈放され、今日

までずっとその義務を果たしているとのこと。さらに、彼は金融詐欺をターゲットにした防犯コンサルタント会社をおこして大成功しているとのこと。また、フランク少年の逮捕に執念を燃やし、やっと逮捕にこぎつけたFBI捜査官カール・ハンラティ（トム・ハンクス）ともずっと友人として仲良く付き合っているとのことだ。

この映画の原作となったのは、『世界をだました男』。これは、1980年に天才詐欺師フランク・アバネイルが出版した自叙伝だ。多くの人達がこの映画化権を買い、何本も脚本が書かれたが、容易に映画化が実現しなかったところ、やっと今回、ジェフ・ネイサンソンが執筆した脚本が注目を集め、ディカプリオが出演を承諾したことにより、急速に映画化が実現したわけだ。

<時代は1960年代・・・。だが・・・>

実際にフランク少年がアメリカ国内のみならず、世界を股にかけて小切手偽造を働いたのは1960年代だ。スクリーンの中に現れる列車の駅などいくつかのシーンでは、1960年代の懐かしい風景が現れ、またパンナム航空の飛行機も「DC8」や「ボーイング707」だから、古い時代だということは分かる。また、FBI捜査官カールの服装（の地味さ）からも、ひと昔前のスタイルだということが分かる、らしい。

しかし、何といっても目立つのはディカプリオのカッコ良さと彼のまわりに群がる女性達の華やかさなので、どうも1960年代という背景がピンとこない。

値段を交渉した挙句フランクと一夜を共にする、モデルで高級コールガールのシェリル・アン（ジェニファー・ガーナー）も、洗練され、カッコ良すぎるため、1960年代のコールガールには見えない。可愛そうなことに、彼女も偽造小切手の被害者だ。もっとも一夜を共にする値段を、300ドルからスタートして1,000ドルまでつり上げながら、1,400ドルの（偽造）小切手をもらって、お釣り400ドルを現金で渡すというのは、あまりにもセコイと思うが・・・。

はっきりと1960年代だと分かるシーンは、詐欺師フランクが有名になって、「空のジェームズ・ボンド」と呼ばれていることを知り、すっかりその気になったフランクが、ジェームズ・ボンドになりきろうとするシーン。ジェームズ・ボンドと同じスーツに身を固め、車もボンド仕様のスポーツカーだが、このジェームズ・ボンド役の俳優がロジャー・ムーア、ティモシー・ダルトンやピアース・ブロスナンではなく、『007は殺しの番号』のショーン・コネリーであること。

<アメリカは小切手社会>

1960年代のアメリカには現代のようなATMはなく、「小切手社会」だった。市民は誰もが銀行に「checking account」という小切手だけが対象の口座と小切手帳を持っていて、ガス、水道、電気などの料金や買い物さえも、小切手を切って支払

っていたとのことだ。もちろん、給料（週給）の支払も小切手であり、この給料の小切手のことを、特にpay checkと言ったとのことだ。

のように小切手の便利さはあるものの、逆にその不渡りも多かった。しかしアメリカでは小切手の不渡りは日本で大騒ぎするほどの信用失墜ではなかったらしい・・・。

<フランク少年と小切手>

フランク少年がパンナム航空のパイロットの「制服」の信用力に目をつけて、小切手偽造を始めたのは16歳の時からだ。裕福な家庭の1人息子として何不自由なく過ごしていたフランクの父親は、地元ロータリークラブの名士だったが、脱税容疑で税務署とケンカ。事業は行き詰まり、家や車を売る羽目に。その挙句、遂に両親が離婚。そんな中、フランクは家を飛び出し、やむを得ず「自立」の道を選んだ。

誇り高き父親は16歳のフランク少年に対して、わずかの限度額ながら「一人前の銀行の顧客」であることを示すために、「おまえのchecking account（銀行口座）を作ったからな、これを好きに使い」とchecking book（小切手帳）を手渡した。

フランク少年がその小切手を最初に使おうとしたのはマンハッタン行きの電車賃だ。彼は駅の窓口で、3ドル50セントの運賃を「小切手で払っても・・・？」と聞いた。

<タイトルを何とかして>

『キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン』とは『Catch me if you can』。これを直訳すれば「もしできるなら、私を逮捕して（もいよいよ）」というもの。このタイトルのつけ方については、後述の浜村淳の『浜村淳のシネマレビュー』も文句をつけているし、平成15年5月18日付『毎日新聞』でも、江川紹子氏が「昨今のカタカナタイトルは、まるでただの商品名」ときき下ろしている。また「長たらしい、『キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン』などは、いっそ英語のままにしてくれと思う」のは私も全く同じだ。

<総評>

スピルバーグ監督、レオナルド・ディカプリオとトム・ハンクスの共演という超一流の集まりだが、映画の出来は「まずまず」というところ。ネタがネタだけに「感動作」とはなりえないが、犯罪者をターゲットにした題材を暗く描かず、楽しく(?)仕上げている。トム・ハンクスの演技はさすが。もっとも大勢の捜査員を引き連れ、ピストルを抜いて、フランクに迫っていきながら、取り逃がすバカさ加減はちょっとサマにならないが・・・。

フランクの性格形成に大いに影響したはずの両親の人物像や離婚による離別劇も手際よく描かれて分かりやすい。

そして、ニセ医者にコロリといわれる看護婦や高級コールガールもいい出来。

だが、何かしっくりこない。それは何かというとディカプリオが16歳の少年フランクを演じていることだ。いくらハンサムでもまたいくら若づくりをしても、ディカプリオを16歳の若者（未成年者）に仕立て上げるのはちょっとムリがある。

女たちがフランクのカッコ良さにコロリと騙されるのは、やはり彼がカッコいい男性だからであり、16歳の「お坊ちやま」だからではないだろう。ジェームズ・ボンド並み(?)の「女のたらし込みのテクニック」や「ベッドテクニック」は、いくら早熟であっても16歳ではムリだろうと思うが・・・。

そんなつまらんことを考えるのは、やはり俺がスケベオヤジだからか・・・？

なお、『examiner』2003年4月号の『浜村淳のシネマレビュー』にもこの映画の評論が載っているので、これも是非読み比べてもらえば面白いと思う。

2003（平成15）年5月19日記